特集に当って

仲本 秀四郎・柳井 浩

図書館には万卷の書が積まれている。いや万卷という語ではひかえ目にすぎよう。中規模の図書館でさえ数十万巻の蔵書をかぞえる。そればかりではない。最近における情報生産量の爆発的な増加は、さらにこれを急速に増大しつつある。一方において利用者の側からすれば、たくわえられている情報の量は多に越したことはないというもの、その中から自分が欲するものとめぐり合うことが次第に困難になってくる。結局のところ、特定のものばかり利用することになりかねない。図書と利用者のあいだに立つ多くの図書館員の強い使命感と献身的な努力にもかかわらず事態の変化に追いつくことは困難である。

これに対処する数理的でシステマティックなアプローチがどうしても必要である。図書館や情報管理にORを適用しようとする動きは古くからあった。しかし残念ながら研究上も顕著な発展は見られていないし、また実際的に大きな効果をあげるには至っていない。メカニズムや手続きが整理されていない事情もあろう。管理や利用状況のデータ解析も不足している。研究面から見ても、ユーザスタディの段階では多くの調査がなされながら、目的意識が明確さを欠き、実際の計画・運営に成果が反映されていない。現象を説明するためのモデルは作られても、知的興味の対象にとどまり計量化されないままに忘れられる。過度の数学化は実務家を遠ざける。——これらは新しく生まれた情報関連分野の科学の多くが、発達の過程で

体験する共通のなやみである。OR自身も決して例外ではなかったと編集子は考えている。

しかし、図書館業務における計算機の利用も一般化してきた。OR自身もそれなりに成熟して“大人”になってきている。機は熟しつつある。この分野へのORの応用に、次の発展を期待する条件は、今やそろいつつある。そればかりではない。ニーズのほうも切迫している。毎年出版される書籍の数がこのように多くなつては、計量的方法にもとづかなければ、どのような図書をたくわえるべきなのか計画が立たない。いらぬ本にはいらぬという合理的な判断が必要だ。計量情報学という、図書館関連科学のうちでも最も基礎的な分析を主とする分野を特集のテーマとした理由はここにある。

特集の各論文には、いずれもこの分野のそれぞれの視点からの概観や新しい試みが述べられている。原田勝氏は計量情報学全体の歴史と動向を、小野寺夏生氏は Zipf-Bradford 分布という計量情報学における基礎的なモデルに関する数学的説明とその問題点を述べられている。浅井勇夫氏は文献の引用頻度の解析について、また仲本は文献の寿命というテーマをあつかった。

これらの論文から、読者は計量情報学の現状を推察することができよう。単なる知的興味の対象としてばかりでなく、読みながらすでに実際的なアイデアをもたれるむきもあろう。さっそく手を染めようとする研究者もあろう。それこそ編集子の願いである。

研究者にとって、図書館はもともと身近かなものである。情報源として不可欠である。図書館を一層よく機能させるのにORが役立てば以って瞑すべしである。大学の場合なら、学生の卒業研究としても恰好のテーマが見つかる。一考をうながしたい。